

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現われた死生観について

(特に「新クリストーフオルス」を中心として)

小 島 尚

一

ヨーゼフ・ナートラーが「ドイツの種族および風土の文学史」⁽¹⁾の中で言っているように、ドイツの中東部地方の種族は外的生活においては受動的で、一般に内向的な性格である。特にシュレージエン地方では恐らくはスラブ人の血がドイツ人の血へ流れた一七世紀末の新教運動の敬虔主義の流れを汲むヘルンフォート派の同胞教会(一七二二創立)は平和的で、しかも厳格敬虔な日常生活の中に隣人愛の実践をモットーとしていた。シュレージエンに生まれ、青年時代を過ごしたゲールハルト・ハウプトマンの平和愛好の同胞愛と、東洋的な神秘思想と、一見ドイツ人らしからぬ受動的態度は以上の事実に基づくところが多いと思われる。

ハウプトマンの半自叙伝「わが青春時代の冒険」⁽²⁾によると、ゲールハルトの父は冷静な合理主義的性格の持主であったが、母は温かい愛らしい情熱的な性格で敬虔な信仰を持っていた。この点ではゲーテの

両親の場合と似ている。ゲールハルトと母の感情的つながりは密接であった。もっとも両親の間には楽園からの追放とか、原罪とか、罪一般とか、煉獄とか、地獄とかが話題に上ることはなかったが、「神様とともに歩みなさい」とか、「神様のお助けで」という慣用句は何か新しい企画の前には両親の口から自然に出て来る言葉であった。ホテルの経営に専念していた父は、ある月夜の晩に家へ帰る途中で、しきりに彼の名を呼び、助けを求める声があるので、立ち上まってその当りを調べて見ても異常がなかったため、そのまま意に介せず帰宅したが、丁度同じ時刻に彼の知人が亡くなったことを後で知ったという。

ゲールハルトは末子で、二人の兄と一人の姉があった。彼は幼年時代から生の解き難い謎の恐怖から、遊び、夢、空想、芸術の世界に逃避しがちであった。総じて若きゲールハルトは死に対して強い好奇心を示した。仏教の言う前世の思想が彼の心に早くから生まれた。そして後年仏教の輪廻の思想に強い感銘を受けている。この点現実肯定的運命愛と彼岸否定の上に立つ差異はあるにせよ、ニーチェの永劫回帰

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現われた死生観について(小島 尚)

の思想と一脈相通するものがある。ヨーゼフ・カピロ「G・ハウプトマンとの対話」⁽³⁾の中でハウプトマンは「生とこの世における一切は反映にすぎない。世界は人間の、人間は世界の反映である。丁度肉体的存在が心理的存在の、心理的存在が肉体的存在の反映であるように。それらがすべて一つに集まって永遠的生活の切目のない鎖を作るが、その鎖は初めも終りもない円であり、初めであると同時に終りである。過去と未来との間には覚醒と睡眠、潮の干満ほどのはっきりした限界もない」と語っているが、また「現存の自分は何十万年何百万年の過去の集積の所産であり、その間ずっと生き続けて来た結果として現在の自分があるのだから、未来の自分も当然存続して行くものと信ぜざるを得ない。死は生の一形式である。生と死は光と影の如く一体であり、生きる者は必ず死に、死ぬ者は必ず生まれる。仏教の言う生死一如であり、生者必滅、滅者必生である」と言っている。

ハウプトマンの戯曲ミヒャエル・クラマー (Michael Kramer)

(一九〇〇)の第四幕で、「私の芸術は私の宗教である」という信念を持つ画家父のミヒャエルが、自殺した天才的画家息子の死顔を前にして、「死と愛は偉大なものである。愛は死のように強しいが、逆に死は愛の如く優しい。死は人間的経験の最高のものである。死は生の最もおだやかな形式であり、永遠の愛の生んだ傑作である」と、弟子のラッハマンに向って述懐している。

フロイトの精神分析によれば、夢やヒステリーは抑圧された性欲の

変態的満足 of 現われということになるが、ハウプトマンは無からは何も生じないことを確信しているゆえ、あらゆる幻影、夢、非現実的なものも一度は現実であったし、人類が太古から不滅を求め、不滅への意識的意志が存在し、不滅こそあらゆる宗教や文学の基本であったという事実は、我々が不滅の実質を我々の中にもち、この器官がいつも働き、絶対に存在するにちがいないということに対する証左である。

靈魂の不滅は我々が現在の存在以前にすでに存在していたということに確かな支柱を見出す。多くの夢や幻想もかつての存在形式への思い出にすぎない。現に自分自身を見ている人間自身が自己の過去へのほてしない追憶であって、それなしには人間は現にあるところの人格ではないであろう。なぜなら人間はたえず変化するもので、つねに同一であるという意識は記憶の問題にすぎない。人間は流れる川のようなもので、川床はいつも同じだが川の水はつねに移り変るとカピロに語っている。また「私は死を恐れる人間には属さない。なぜなら死は私の目前よりもはるかに背後にすでにあったことを知っているからである。すぎ去った毎日は一つの死である。私がかつてあった少年、青年、成人はいわば死んだのだ。彼等について生きているものは追憶である……死に対する永遠の恐怖の中に生きることが真に生きることではない。決して終りを考えず、空虚な生活をし、その生活を把握しないゆえ、意識的に楽しまず、漫然と生きている人たちも決して真に生きたこともない人たちで、わざわざ死ぬ必要もない人たちだ」ともい

う。

若きゲールハルトは宗教の形式には余り興味を唆られなかったが、その内実は絶えず彼の関心事であった。ある日の食事で長兄のゲオルクが「イエスは死ぬべき人間の子であって、神聖な神の子ではないと思う」と発言したとき、次兄のカールは「そんな冒瀆な言葉を口に出すと、神様に罰せられるぞ」と言って泣いたというが、このカールもゲールハルトも大学時代には実証主義的或は唯物論的時代思想の影響を受け、既成宗教の批判に熱意を傾けている。

ゲールハルトは一二才でブレスラウの実業高校に入学し、四年間を過ぎたが、彼の一二才のとき、彼と親しい天才的な従兄弟のゲオルク・シュューベルトが一二才で急死した。ゲールハルトが詰込み的な当時の学校教育に反撥して所期の成果を収めず、遂に中退して一年半ほど叔父シュューベルトの家で農業見習として働き、自然に親しむことができたが、前記ゲオルクの死はつねにその両親の叔父夫婦の心を占め、特に叔母は亡き息子の墓に詣でて、祈り、聖書を読み、賛美歌を歌い、生きている人の如くにその霊に話しかけるのが日課であったが、これこそ若きゲールハルトをして死者への霊媒を現実と感ずる神秘的な宗教的情操を養わしめて余りあった。

一八才のとき、ゲールハルトはミケランジェロに触発されて、一八八〇年から一年半ほどブレスラウの美術学校で彫刻を専攻したが、彼は校風になじまず、彫刻も己の天職との自覚に達せず、そこを退学

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現われた死生観について(小島 尚)

し、遂に一八八二年十一月から八三年二月までの冬学期をイエーナ大学の聴講生として、オイケンとヘッケルから夫々哲学と生物学の講義を聴き、さらに八四年十一月から八五年二月までベルリン大学の聴講生として冬学期の席をおき、仏文学のクルティウスや、生物学のデュ・ボア・レイモンや、史学のトライチュケ等の近代思想にふれ、彫刻にもたずさわる傍ら、古今の文学を耽読した。彼は近代社会主義的思想に関心をもち、既成宗教、特にカトリックの形式主義やドグマへの反撥が彼の習作の随所に見られる。マルクスの資本論の第一巻にも目を通したというが、所詮マルクスの唯物史観や階級闘争の理論は彼の肌になじらなかったようである。ゲールハルトは兄のカールと違って、友人との理論的な討論を好まず、むしろ苦痛の表情を示したというし、彼の関心事は抽象的思想ではなく、人間とその運命であった。彼のアフオリズムの一つに「概念家は目標より遠ざかり、芸術家は目標を包括する」とある。

彼に最も影響を与えた思想家や作家は、一七世紀の同郷の神秘主義的思想家ヤーコブ・ペーメ、ゲーテ、シェークスピア、プラトン、ルッターであるが、その外ノヴァーリス、ヘルダーリン、ヘルダー、クライスト、シラー、ビュッヒナー、さらに外国のダンテ、トルストイ、ドストエフスキー、ホイットマン、ゾラ、ストリントベルク、イプセン等の文学や思想の感化を見逃すことは出来ない。しかしそれ以上に聖書を第一として、インドの吠陀、仏陀の説教集、老子、孔子、

ペルシャのゾロアスター等は彼の座右を占める愛読書であった。

二

次にゲールハルト・ハウプトマンの主要な宗教的著作を概観して見ることとする。

「イエス研究」(Jesus-Studien) は一八八五年彼の二三歳のときから一八九〇年までかかった野心的な著作で、その内容を要約すると、イエスが敵のために自己の生命を捨てるほど大きな愛はなかった。敵とはパリサイ人、民衆およびイエス自身の使徒たちである。つまり彼の弟子たちも精神においてはイエスの敵である。なぜなら彼等には利己(Selbstsucht)が中心であったが、イエスの中心は無私(Selbstlosigkeit)であったから。人間はエホバの子であるが、利己から無私への再生によって、はじめて聖霊の子となる。イエスは無欲の宝を人類の畑に発見した最初の人間で、自己の使命を果たすために自己の生命を賭した。イエスは無私を言葉で説教するだけでは虚偽であると考え、自分の教えを修正した。イエスが弟子の足を洗ったのも無私的行為の現われである。「一粒の麦死なずんば……」⁽⁴⁾はイエスの自己犠牲の死による教えを象徴している。また「神の国は実にあなた方のだただ中にあるのだ」⁽⁵⁾とのイエスの言葉は我々が利己心を抱かず、完全に無私であることを前提とし、イエスの説く天国は超越的なものではなく、この世にあることを示すものである。要するにイエスの中に占めた無私、

自己犠牲と、使徒たちの中に占めた利己、キリストからの逃避との距離は、今日のキリスト教とイエスの実際の教えとの間の距離に等しいとハウプトマンはきめつけている。

ハウプトマンはこの論文で、イエスの復活もふしぎではないとは述べているが、彼は「聖書を他のすべての書と同じく批判的に読んだ。

その結果はどの本にも絵画にもない人物が私のイエス像である。それは学問的価値はないとしても自主的な精神的労作の一つである」と記しており、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きてゐるのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」⁽⁶⁾と説くパウルのいわゆるオーソドックスな復活信仰の上に立っているとは言えない。

「寛容」(Duldsamkeit) はハウプトマンがノーベル賞を貰った一九一二年作の随筆。「寛容は未来の宗教である」という書き出しで、「寛容なしには自由はない。寛容な中国人は『兄弟よ、そなたの宗教はどんなに美しいことか』という」この論説はレッスングの「賢人ナターン」に似ている。さらに「真の芸術は寛容の要素をもつ。殊に音楽は然りであって、他の諸芸術の魂である。芸術は平和のみでなく、宗教をも実現する。つまり芸術の中のヒューマン的なものが神的なものと結合する。偶像崇拜は僧侶制度の現われである。真の宗教は偶像や抑圧とは無関係で、平和と同義語である。偶像の創造者たる僧侶が世界を抑圧した。僧侶の偶像崇拜のために大多数の血が流れた。三〇年戦

争に至るまで残酷極まる偶像戦争の中で、無数の人間がぎせいにされた。皇帝のネロやディオクレティアンのキリスト教徒迫害は誇張されている。最悪の迫害はクリスチャンによるクリスチャンの迫害である」と結んでいる。

ハウプトマンは一九二三年にカール・オイゲン・ノイマンによる仏教の独訳に対して、ルッターの聖書の独訳と比肩し得る快挙である」と、その功績を称えている。

「芸術は私の宗教である」(Die Kunst ist meine Religion) は彼の生誕七〇歳のとき行った講演であるが、その中で「バッハの音楽、ダントの神曲、ミケランジェロの彫刻、ゲーテのファウストは清らかさにおいて水滴に優り、硬度においてダイヤモンドに優り、その放射は超人的、超地上的分野に及び、完全に宗教の照射を受けていないであろうか」と結んでいる。もっともハウプトマンは既述のカピロに向って、「ファウスト」はドイツ文学の持つ最も美しい最も深い英知のこもった叙事詩であるが、ドラマとして見ると、部分的にはすぐれた劇的な所が多々あるものの、全体的には非戯曲的な作品である。それは主人公が余りに理性的に哲学的に行動しているせいでもあるが、その外に氣息といったものが欠けていて、陰影のつけ方が余りに固すぎるか弱すぎるという不満を述べている。

「ユダ・イスカリオットの遺言」Das Testament des Judas Iskariot(一九二二)という小品は、ユダがナザレ人たちに迫害され、かくれ家

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現れた死生観について(小島尚)

に過し、八〇歳になった今、遺言として書き記すという想定になっている。その内容は「私がイエスを銀三〇枚で裏切り、後悔して自殺したなどとは真赤なうそである。もともとイエスの母マリアは結婚前に子供をみごもり、ヨセフはこっそり彼女から去ろうと思ったが、心を変えて離縁状をやらす、自宅に連れて来たので、彼女は石打ちの刑を受けずに済んだのだ。イエスはメシアでも神の子でもないのに、自分を人の子と称した。イエスは十字架で死んでしまったのではない。あのときイエスの外に二人も十字架にかかっていたので、安息日を越えて死骸が十字架にかかっているのは好ましくないとユダヤ人たちは考え、ピラトにイエスの骨を折ってくれと頼んだ。ピラトは死刑執行を指揮した隊長に、イエスが本当に死んだのかと尋ねた。アリマシアのヨセフは金持でイエスの秘密の弟子であったので、イエスがまだ死んでいないことを知っていたヨセフは、イエスの死骸を引き渡して欲しいと請うた。隊長もピラトも金持のヨセフに恩義を受けていたので、隊長はイエスが死んだと言い、ピラトもそれを信ずるふりをした。つまり前記ふたりの骨は折らしたが、イエスの骨は折らなかったのだ。彼等はイエスを十字架より下し、ヨセフの庭に運び、ヨセフ自身のために作ってあった墓にかくし、イエスが復活し、死後四〇日にして生きながら昇天したという噂をまき散らしたのだ」という手記の形になっている。これはハウプトマンがイエスをあくまで人間として歴史的に捉え、イエスの死にいわゆる合理主義的解釈を施そうとした当時の

心境の一端を物語るものであらう。

再洗礼派 (Die Wiedertäufer) の運動はカトリック教会やルッター及びツヴィングリの創立した教会に反対して、聖霊、内的光、内的啓示を強調し、幼児洗礼や誓言を斥け、信教の自由のために闘った。牧師トーマス・ミュンツァー (一四八九—一五二五) がその運動の先頭を切ったが、彼はテューリンゲンの農民戦争を指揮して戦死し、ヨーハン・フォン・ライデン (一五〇九—一五三六) がベルンハルト・ロットマン (一四九五—一五三五) と共に中心となり、一五三四年ミュンスターでシオン王国を作ったが、ロットマンの死の翌年ライデンは処刑された。一方一五四〇年メンノ・シモンス (一四九六—一五六一) が北海沿岸に温和な一派を開き、やがてオランダが中心となり、さらに北米やカナダにも拡がって行った。ルッターは彼等を狂信者と呼んで抑圧したが、ハウプトマンはこの運動も激情的な炎のみでなく、ドイツの魂の一条の光を放っていたとの見地から、前記ロットマン、ライデンの外、憂うつな傍観者として芸術に自己の福音を求めていた画家アンブロージウス・ホルバイン (一四九四—一五二〇) (画家ハンス・ホルバインの子) などの人物を配して、一九五〇年以来劇に組み立て断片的に発表したのが、完成しないままに、一九二二年以来少し内容を変えて別に同名の小説を試み、これも未完成のままに終った。

この小説「再洗礼派」の中で、ロットマンの言として、「ミュンツァーは『神がその約束を果すように我々は祈りの中で神に強要せねばならぬ』と説き、処刑されたが、我々の間では彼は殉教者と見なされている。貧民たちはひざまずいて祈り、賛美歌を歌い、天国を信じつつ、殺されて行った。ルッターは叛乱を起こした農民たちを絞め殺し、刺し殺してよろしいと公言した。ルッターは君侯たちの信用を博したが、庶民の信頼を失った。……ルッターは人は善行によって救われるのではないと説くが、それならモーセの十戒などは無意味になる。私はルッターに『もし神の掟を守ることが無意味なら、神は己がひとり子イエス・キリストのぎせいによってわが罪を許し給うのだと信じさえすればいいのか』と尋ねたら、『その通りだ』と彼は答えた。ルッターの結論は『人間が自由意志から罪を犯すかのように、なぜ神が人間を罰し給うかを決定するのも神のみわざだ。我々人間はその理由を探り求めるべきではない』というのだ」と書き、農民戦争の際ルッターの取った政治的態度に対する作者自身の疑問を投げかけている。

ハウプトマンは自然主義的劇作「日の出前」を以て文壇にデビューし、初期から中期にかけて「はたおりたち」、「らっこの毛皮」、「御者ヘンシェル」、「ローゼ・ベルント」、「ねずみ」などのリアリズムの傑作を書いたが、彼は他面最初から夢幻的要素への憧憬の強い作家で、「ハンネレの昇天」(Hanneles Himmelfahrt) (一八九三) は施療病院で高熱に浮かされ、断末魔の苛酷な現実に生きる少女ハンネレの心に写し出された甘美な天国の世界を対照的に皮肉に捉えて追求したユニークな作品である。

「使徒」(Der Apostel) (一八九〇) は宗教的妄念にかられた一青年が、風変わりな僧服を着て、自分を新しい救世主と思い込み、世界平和を人々に告げる夢想に浸りながら、豊かな自然感情に満されつつ、チユーリッヒ付近の山路を歩き廻る姿を自然主義的筆致で丹念に描いた短篇である。

「キリスト狂エマヌエル・クヴィント」(Der Narr in Christo Emanuel Quint) (一九一〇)。この長篇の主人公クヴィントの姿の一面は短篇「使徒」を想起せしめる。クヴィントはシュレージェンの山村のある家具職人の継子で、知能は低い、聖書を愛読し、聖書にのみ慰めを求め、隣人愛的キリスト的精神に満ちている。彼はあるとき頼まれてある老人の病気をキリストへの祈りによって偶然治して以来、次第に庶民の熱狂的な信者を集め、自他共に信仰の奇蹟に酔い、いつしか救世主の生まれ変りのような妄想にかられ、山村を説教して歩く。後には、ニーチェの言う「神の死んだ」現代において真剣に神を求めている知識人の関心をも唆り、幾人かの信奉者をもつに至るが、一方教会の牧師から誇大妄想的な素人の説教の誤りを論されたり、警察からも危険人物視されて拘留されたり、迫害を重ねる毎に、ますます殉教者の気分を味わう。しかし弟子の中からユダのような裏切り者も出て、遂に人々から忘れられ、ひとり淋しくスイスの雪の中で凍死する。主人公を知能の低い狂信者としたことに、近代物質文明時代の宗教活動に対する作者の皮肉な考察が窺われると共に、「ここ

ろの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」⁽⁷⁾や「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」⁽⁸⁾などに現われた純粹な原始キリスト教精神への作者の熾烈な憧憬が滲み出ていて、主人公に対する何かしら共感を讀者に唆る作品である。

「ソアナの異端者」(Der Ketzer von Soana) (一九一八)。この中篇は「クヴィント」の禁欲、精進へのアンティテーゼをなす作品と言える。アルプスの山麓で献身的な布教活動に従事するカトリックの一青年神父が、兄妹の間から生まれ、村八分の中に育ったある若き美貌の女性に対して、差別なく神の愛を説くが、アガペーとエロスの相剋を通して、いつしか二人は大自然の中に心身共にエロスの歡喜に結ばれ、神父は聖職を抛って二人はアルプスの山中に暮すことになるが、これは神父の手記の形をとり、文体的にも優れた佳品である。

「白き救世主」(Der weiße Heiland) (一九二〇)。このドラマは一六世紀のスペイン軍が、メキシコ皇帝モンテズマを甘言を以て欺き、キリスト教布教の美名のもとに、メキシコを侵略し、物欲を恣にするといった荒筋で、後進国の異教徒、異民族に対して自負して来たキリスト教国、文明国であるヨーロッパ民族への痛烈な自省と批判を盛った作品である。

三

「新クリストフオルス」(Der neue Christophorus)

この長篇小説はハウプトマンが長い間最も心血を注ぎながら、未完のままになった野心的な作品である。しかしドストエフスキの「カラマゾフの兄弟」も末弟アリョーシャの将来の叙述は未完のままに残されたが、世界文学において不朽の光を放っているように、ハウプトマンのこの作品も彼の世界観、死生観の総決算を文学の形を借りて表出したものと言えよう。書き出しは非常に印象的な円熟した自然描写であるが、中途から所々余りに神秘的な難解な夢幻的描写が続出し、またゲーテの「遍歴時代」に見るように、論文的な思想の展開となつて、渾然とした文学的表現に終始していない憾みがある。ハウプトマンの作品は総じて日本文学におけるような具象的な感覚的な描写に富み、ドイツ文学一般に通有な抽象的思弁の羅列は少いが、その点この作品には読書家であつたハウプトマンの文学的思想的教養の集積の一端を見る思いがする。

ハウプトマンは既述のヤーコプ・ベーム(Jakob Böhm)(一五七五—一六二四)の著書を愛読し、ゲーテのスピノーザにおけるような感化を受けた。ベームによれば神は一切であり、全にして無、一にして多であり、万物の根源、永遠の静止であつて、神は神自身にすら啓示されない。神は善惡の対立を含むその調和的統一であり、善を生むた

めには惡は必要である。神の愛はそれと対立する罪惡とともに初めて現われる。しかも神の啓示は学識深い神学者に与えられるのではなく、ただ内的信仰に生きる素朴な人に対して神秘的體驗を通して与えられる。フリードリヒ・シュレーゲルはその著「古代及び現代文学史」(9)の中で、ベームは悟性よりも詩的空想の方を重んずる神秘家である。詩的美しさ、感情の深さにおいて、超感覺的對象を表現しようと努めた詩人のクロップシュトック、ミルトン、ダンテと比べても、彼は決して劣らない。彼のドイツ語の造形的力とリズムカルな泉から流れ出る豊かさ……」と述べている。ベームは歴史家と哲学者の結合というよりは、詩人と造形美術家の結合と言えよう。

さて、この作品については、すでに一九一一年八月十八日に「ガラハット(Galahad)(求神者)」という題のメモが残っており、一九一八年六月十三日にはメアリン(Merlin)(紀元五世紀頃のイギリスの伝説に出て来るアーサー王に仕えた魔術師兼予言者)と改題したが、また別にエルトマン(Erdmann)(直訳すれば土男だが、墓の中から生まれた者の副概念をもつ)という題でメモを始め、メアリンとエルトマンの間を彷徨したが、一九二五年に出た日本の禅の独訳を読んで感銘を受けた一九三七年にはクリストフオルスの名を前面に出し、「思惟(精神)と万有の間には差異なし」と書いている。こうして一九四三年に第一部が出版されたが、第一部と第二部の合本は一九六五年、すなわち彼の死後一九年にようやく単行本として刊行され、つづいて

一九七〇年ハウプトマン全集の第一〇巻目にその補遺と共に収録されている。

クリストーフォルスは東方教会の一四人の聖人の一人で、彼は三世紀にシリヤに生まれ、リキア地方に宣教、サモスの町で捕えられ、殉教したと言われる半ば伝説上の人物である。クリストーフォルスは幼児キリストを肩に抱いて川を渡りかけたら、川の真中でイエスが急に重くなり、クリストーフォルスは水につかり、期せずして受洗したという。その名は *Christophoros* (キリストを運ぶ) に由来する。

この作品に現われる最も重要な人物はクリストーフォルス神父であり、彼はプロテスタントの牧師の経験もあるが、より一層カトリック的教養を身につけ、山中に女中の外は独り居を構え、万巻の書に囲まれて瞑想に耽るが、時折頼まれて近くの伯爵家に出かけ、宗教や歴史や文学の講義をしたり、山間の人々に医療活動を行ったりしている。彼はキリスト教に独自の深い知識と体験を持っているのみでなく、仏教にも共感する所が多い。またギリシャ文化にも造詣が深く、ダンテやゲーテに心の古里を見出す教養人でもある。カトリックの形式主義と権威主義に反撥し批判していたハウプトマンが、この小説の主人公にカトリック的教養を与えたのは、カトリックの歴史的役割と意義に対するハウプトマンの認識の推移を暗示するものであろう。新クリストーフォルス神父はハウプトマンの履歴とある程度重なっており、ハウプトマン自身の理想像と言えよう。

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現われた死生観について (小島 尚)

神秘主義的夢想家の天才児エルトマンは現代のキリストとして、むしろ現代のドイカリーオン (ギリシャ神話の中のプロメーティスの子。妻のピラとともに大洪水をしのぎ、人間を後世に残した) として、この混沌とした現代の悩みに対応して、遂に殉教者の道を辿らざるを得ない運命を持って生まれて来た。しかしこの作品では彼の一二歳までの記述で終っている。

プロテスタントのパーヴェル牧師はルッターに傾倒し、オーソドックスの信仰を持つが、パーヴェルの意見はハウプトマンの心の片隅にひそむ他の一面の思想や希望や憧憬を代弁するものであろう。

ハウプトマンは狂信的なナチスが政権を取った一九三三年以来、理性と文筆の力だけでは押し寄せてくる時代の流れに対しては如何とも抗しがたいというベッシミスティックな気分支配され、晩年の力作「アトリーデン四部作」も、滅び行くアトレウス一家を描いたギリシヤ悲劇を借りて、ゲーテの「イフィゲーニエ」に現われた人間の個人的善意では解決し得ない宿命観を吐露しているが、しかしハウプトマンは一方個人の微意もいつかは役割を果す時が来るという予言者的信念を失わなかったらしく、パラダイスへの道はヒューマニティーを通してのみ可能であり、人類の救いと神の国の実現への期待をこの作に托したと思われるのである。

次に「新クリストーフォルス」の筋を辿りつつ、この作品の持つ思想と意味を考察して見よう。

第一卷

ある辺鄙な山地部落に峠茶屋があるが、その主人は靴修理工をしている。ある春分の日、三日も続いた荒天候の真夜中一二時に、外の木戸には錠をかけておいたのに、しきりに呼鈴が鳴るので、目を覚めた妻が店に出て見ると、いつの間にかガラス戸が開いて、一七歳位のうら若い女性が蠟のように黄色い髪をふり乱して、赤坊に飲ませる「ういきよう蜜」を欲しいと乞うた。あいにく持ち合わせがなかったので断ると、その女は「あしたね」と溜息をついて立ち去った。そこで同じく嵐つづきの翌晩、山住いの神父を中心に、樵や山林官やその他合計六人が灯を消して待ちかまえていた丁度正一二時に、ぼろ／＼の着物を着た幽霊のような姿がすう／＼と現われた。彼女のいともやさしい乙女らしさを湛えた蠟のような顔には苦悩の線が刻まれ、その子供らしい口元からは血が滴り落ち、その苦しみの体からは死臭と同時にバラダイスの無限に美しい音楽と花の香りのようなものが発散していた。彼女は依頼していたういきよう蜜を受け取ると、ふわ／＼とガラス戸を通して外へ出て、一条の後光を放ちつつ暗夜へと漂い過ぎて行った。そこで一同つるはしやスコップなどを持って後を追いかけて行くと、その女は山中を通して湖の向う岸の一個所に達したと思うや、ぱっと明るくなって大地にかき消えてしまう。そこで一同その草地に立ちどまり、岩石と土を掘って行くと、新しい墓所があって、その中からかすかに赤坊の泣き声が聞えて来る。すると縦板から出来た細

長い箱があり、それは正しく棺である。箱をこじ開けると、すでに塵になつてしまつた死骸の傍らに、むつきに包まれた生後一週間ばかりの美しい健やかな男の子を見る。

お前は土から生まれたからエルトマン（土男）と名づけると、神父は赤坊を僧帽の布切れの中に包んで、山中の自分の庵へ抱いて帰る。途中橋のない小川を渡るとき、奔流のまんなかで、「汝は新クリストーフォルスなり」という一つの声が聞えて来た。「我は新クリストーフォルスなり」と大声で言葉を返すと、赤坊は急に百ポンドの重さになったが、無事に向う岸へ渡った。

神父が帰宅すると、彼は乳児を女中のガルギに渡した。彼女はシュレージュンの百姓女の出身であつたが、彼女はかつて難産で産児を死なし、嬰兒を故殺した嫌疑で裁判にかけられたこともあり、それらが潜在意識となつてガルギはエルトマンを憎み、虐待し、赤坊が風邪で高熱を発してもそのまま放置したり、あるときは冬の夜に外に捨てたまま、あやうく凍死の寸前に追いやり、折よく帰つて来た神父の手厚い看護で、赤坊はようやく息を吹き返したこともあつた。第三巻の第二章で神父の夢と幻想の中にガルギがギリシャ神話の美女として現われ、二人は熱い抱擁のもとに男女として結ばれる場面も出て来るが、幸いエルトマンは彼女の虐待も受けずに順調に育つて行つた。

エルトマンは物心がついてから、篤信のパーヴェル牧師の身許に預

× × ×

けられ、賛美歌や祈りや聖書の敬虔な雰囲気の中で育って行った。第八回目の誕生日を終えた少年は、花盛りのリンゴの老木の枝の間に腰を下して聖書を読んでいた。同年輩の何人かの子供らを牧師は塾を開いて、読み書き、算数、図工、音楽などを教えており、敬神の心厚いラウエ夫人は、ハウスキーパーとして牧師を補佐していた。牧師は我々クリスチャンはキリストの受難によって救いを受けるのだという堅い信仰を持っていた。エルトマンは自然に親しみ、野山をかけめぐり、餓鬼大将でもあったが、他の子供たちと違って妙に大人びた早熟な天才児で、瞑想的な夢みがちな一面があった。彼は度々夢の中で母親に会ったが、その姿は一七歳位のうら若い女で、ブロンドの髪をふり乱し、苦悩の顔を刻みつけ、彼女がかき消えた後は、いつも彼の口元にういきょうの蜜を残して行った。彼の感情の衝迫は余りに強過ぎて声を出して叫ぶことも出来なかった。霊界の母は「この世の大きな悩みや死を超えて生き抜くように」と少年に諭すのだった。彼は孤児として育ち、離れ島に漂流したような隔絶感、孤独感にさいなまれた。彼はあの世を一目見たいと思い、この世の果てに行きたいと願った。そして聖書のヨハネ黙示録の神秘的な表象世界が彼の心の内部に騒いだ。餓鬼大将で夢みがちでヨハネ黙示録を愛読するくだりは、ハプトマンの少年時代の再現である。

エルトマンは聖書を読みつつ考える。アダムとイブはカインとアベルという二人の息子を持っていたが、善人のアベルが悪人のカインに

ゲールハルト・ハプトマンの作品に現れた死生観について(小島尚)

殺された。殺すとはどういうことか。死とは何か。ここにある石はなぜ存在するのか。存在とは何かと考えつづける。エルトマンは自然の中で遊ぶのが好きで、蛙や鴨や山羊や牛などの生殖行為に接したが、彼自身には性衝動はそう早くからは現われず、同級生たちの不潔な露骨な言葉に反撥を覚えた。ただ女の子に憧れに満ちた切ない愛情をよせたことはあった。彼の心には絶えず善悪、美醜、悲喜、愛憎、苦楽、明暗などの相反した要素が交代し合った。

エルトマンは使徒信条(10)を朗読していた。牧師はエルトマンにその章句を暗誦させて、それが自然に少年の心に刻みつけられるであろうことに意義を感じていた。要するに少年がこのクレードに神様の思し召しとして黙って頭を下げ、畏敬の中に崇拜して欲しいものと、牧師は念願していた。

「エルトマンよ、聖書は我らの救い主イエス・キリストの使徒たちに聖霊によって書き取られた聖なる本だ」という牧師の説明に対して、エルトマンは神様はなぜ聖書をドイツ語で書き取られたのかと聞き、ルッターがヘブライ語とギリシャ語からドイツ語へ旧新約聖書を翻訳したのだとの答えに、全能の神はなぜ誰にも分る言葉で書かれなかったのかと反問する。牧師は人間の理性によって神の思し召しのなげという理由を憶測してはならないと諭す。少年はさらに、神様が全能であるなら、聖霊を言葉や文字によらずに、私たちの心の中に植えつけられたらよかったと思うといい、悪魔の蛇が楽園に入ったという

なら、それでもそれは楽園と言えるのか、神様の全知全能はどこにあったのかと問いつめる。牧師は笑って「屁理屈にまき込まれてはいかん。我々は思い悩まずに信じねばならない。しかし悟性の単なる遊戯としてなら、お前はつたのように巻きついたお前の思想を神聖な事柄のまわりに少々はびこらせても構いはしないがね」と答える。

第二巻

人里離れた山岳地帯に住む神父はもと新教徒であったが、次第にカトリック的傾向が強くなり、ローマのカトリック神学校で数年の青年時代を過した。神父は孤独に徹し、万巻の書に囲まれ、神秘的瞑想の中に、大自然の息吹に包まれて生きていた。しかし彼は決して社会や政治に無関心であったのではなく、信仰による人類救済の思想を踏まえ、実践的方面の意義と可能性を信ずる楽天性を失ってはいなかった。神父は山地の人々には各方面の実際的事柄の相談役としても、医師としても、司祭としても奉仕していた。

神父と少し離れた所に、詩や音楽をたしなむ教養豊かなプロテスタント系のヤーゾン・フォン・オイレンシュタイン伯、ヤーゾンの弟フアイト伯、夫人のイネス、その近くにヤーゾンの姉で独身のラブダ、及び離婚して今は独身で彼女と同居しているヨハンナ男爵夫人、さらにカトリック系のエーバーコップフ伯が住んでいて、神父は両方の館に往き来していた。

神父がヤーゾン伯を訪ねたときの会話の内容の一つに、現代は技術

的奇蹟時代ではあるが、それでも僅々一五〇年間に悟性の活動が作り上げたものは大体において神秘として現われている。我々は力を応用し得るが、力の本質は知らない。科学技術は精神的な人間世界の迷夢打破と無宗教（物質化）に影響を及ぼしたが、宗教や芸術、その中でも詩と音楽は今尚その存在を発揮し、神話を作り出す力はまだ消えたわけではないと神父は言う。

またラブダ伯宅へ招待されたとき、神父はダンテの神曲、プラトンの饗宴や、アウグスチンやナザレのイエスにも言及し、彼らのユートピア的な著作や言葉に現われた世界君主国の理念について語り、世界平和の理念の意義を強調する。

神父がルッター的信仰の上に立つパーヴェル牧師と語ったとき、現在の自分は前世からの過去すべての集積であり、古い歴史と悲願の積み重ねとして成長して来た神話、特にイエスの復活の神話を真理として自分は敬虔に受け取っているとの言に、パーヴェル牧師は、救世主の誕生、生活、受難、死および復活を完全に真理と考え、真実であると信じます。復活を神話として受け取るだけでは自分は不満である。聖書の記述はすべて事実に基づいていると確信していると答え、これに対して神父は、ナザレのイエスによる人類の救済はすでに二千年前に行われ、かつ現在まで絶えず行われ来つつあるのであって、これこそ神聖にして尊厳な神話として私の心に定着している。あなたとは多少違った風に、私もナザレの神との交わりをもっている。ナザレの神は

いつも神として可能な復活の状態にあるが、人類の救済は二千年前に行われてしまったと考えて、手を拱いていたくはない。人類の救済はまだ決して完了してはいないと答える。

そこへ地方医のグラッペ博士が現われる。グラッペは立身出世的な俗心の少い高潔な学究肌の医師である。ハウプトマンは医術こそ戦争と対照をなす平和建設的な行為であり、神聖な学問であるとの意見を登場の諸人物をして言わしめている。神父はグラッペに「あなたは産褥熱の病原体を発見してその毒を中和するために、白ねずみと実験用馬に種痘したとの噂ですが、産婦の不倶戴天の敵たる病原体をあくまで探索するのも、あなたがこっけいと思われるところのユートピア的思想ですよ」と言って、医学も宗教もその方法論こそ違え、ユートピアを求める究極の目標は軌を一にするという思想を展開する。神父はさらに語を継いで、我々はパラケルズスの言に従えば、ウムブラーテン (Umbreten) (陰影) の中に生きているが、その中の一つである可視的、現世的エヴェストルム (Evestrum) は壁の上の蔭のような一つ

のものであり、蔭は成長し、物体とともにやって来るが、物体とともにその最後の物質の中に留まる。エヴェストルムは霊的なものと非霊的なもの、感性的なものと非感性的なもの、その両者を含んでいる。もう一つの不可視的来世的トララーメン (Traramen) は理性とともに生まれ、それは不可視の本質の蔭であって、それについて哲学するのは最高の英知に属する。必滅のエヴェストルムはトララーメンの中に

永遠なるものを認識し、最高なるものの存在を認識する。パラケルズスはあの世からこの世へ落ちる多少なり虚妄の影も、また視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚とともに色や形へと、つまり人が象徴と名づける目じるしへと合一するそういう影もウムブラーテンと見なししていると説明し、神父はさらに、ゴシックの建築様式はほとんどウムブラーテンから出来ている。美術、文学、音楽の如き芸術のウムブラーテンは最高級のものであって、御批判はあろうが、哲学や科学でさえ然りであると述べる。

医師は神父に答えて、パラケルズスのウムブラーテン理論は十分なものとは思えぬが、後で自分もよく考えて見たいと思うと言う。神父は「光は色と形を我々の目に媒介し得るものとお考えでしょうが、光だけでは絶対的な闇と同様に我々を盲目にするでしょう。従って精神的なもので光と蔭の共同作業を必要とします。キリスト教は靈魂が神の子であることの外に、肉体は滅びても靈魂は不滅であることを教えたのです」

医師は「精神が肉体より優位であるという考えは錯覚である。人間が感覚を奪われ、意識を失うと、不滅のゼーレはどこに残っているのか。狂人は何十年も生きているが、その人の不滅な靈魂はどこにあるのか」

神父は「賢人シャカは個人の靈魂不滅をも全くの阿呆の教えと称している。彼はキリストとは違った方法で、自然から自己を解脱し、自

然の上に自己を引き上げ、生の窮屈な桎梏と同様、死の桎梏からも身を自由にした。これを考えた器官を人は必滅と言おうが、不滅と言おうが、やはりゼーレに外ならない」

パーヴェル牧師の言として、「アレオパギタはパウルによって回心した最初の司教であるが、彼は罪障深い悟性的活動を断念して、神との神秘的結合を志したが、私はルッターのように理性を放棄し、単純に『私は神を信ずる』がすべてです」

それに対して神父は「私は全能の神を信ずるが、処女マリアの奇蹟を作りあげたのは人間であって、神の人間化などは人間の思い上りだ。我々はそろ／＼また多神論の神々崇拜に慣れてもいいと思う」

牧師は「そんな考え方は悪魔の誘惑であって、ぞっとする。私はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書を絶対の真実と信ずる。真実のためには信仰をすら必要としない」と反論する。

神父はマタイ伝には「マリアがヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に身重になった」とあるが、この文に他人の手が加わって『聖霊によって』となった。しかし一人の身重の少女に関するありふれた事件から、処女、偉大なる母にして女王という神性へと成長するまでには、この二千年間例えば後期ゴシックの彫刻家ファイト・シュトース作『クラカウのマリア祭壇』の示すように、受難の神性化へ何という道のりと力強い発展があったことか。私はかかる神話とその創造は人間に与えられた最高のものであると信ずる」と繰り返す。

牧師は答えて「何ものかを浄めることが出来るためには、この何物かを神的であると感ぜねばならない。神的と感ずる心、深い畏敬と最高美の予感を盛るのは高い芸術である」と述べる。牧師はキリストを神の化肉と考えるが、神父はキリストをあくまで崇高な人間と見、人の子キリストの無私の行為を尊ぶ。神父は十字架のイエスを一つの比喩、象徴と解している。神父は自己の中に住む神的なものを信じ、隠士、隠者への渴仰が強いが、同時に現実社会との絶縁を斥け、全人類の救済即自己の救済と感じているのである。

神父はギリシャ神話のプロメーテウスをキリスト以上の忍苦者と考えている。つまりプロメーテウスは粘土をもって人間を造り、ツォイス（ギリシャの最高神）の神の掟に反して人間に火を与えたために、ツォイスの怒りにふれ、コーカサス山脈の岩にしばられ、日々はげたかにその肝臓をついばまれ、生きることも死ぬことも出来ない。唯一無比の殉教である。プロメーテウスこそギリシャ宗教の一形態である。殊に詩人アイスキュロスの「プロメーテウス」は忍苦と反抗、超人的な人間愛の溢るる作品であると激賞する。

牧師はこの火の呪いを現代の原子力に至る近代科学の破壊力と比較して、科学の本質、火の発展はツォイスの秩序をも破壊し、没落をもたらす。この火の呪いを引き離す純粹愛が必要であり、それには信仰の力が必須のものと説く。「しかし私はイエスの言う『あなた方は幼な子のようにならなければ天国にはいることができないであろう』と⁽⁸⁾

いう小児信仰のマントにかくれて、安楽な暮らし方をして来たと思う。それでもものを見るには盲目が、ものを聞くには聾が助けとならなければならぬ。そこで知識とならんで無知も同様建設的なものだ」と述懐する。

神父はうなずいて「ヤーコブ・ペーメの言う啓示された神はツォイスと同一と見なしていい。その神はツォイスのように立法家であり、秩序者であり、世界の創造者である。悪魔は彼の敵としてふるまう。悪魔は秩序を欲しない。悪魔は彼の没落を欲する。ペーメによればプロメーティスの贈った火は、身を苛む苦悩であるところの自然火である」

以上が第一部出版までの内容である。

第三卷

神父はパーヴェル牧師の内諾を得て、エルトマンを連れてさすらいの旅に出て、山野を歩き廻り、人生問答的教育を施す。

神父はファウストの第二部で周知の、人間の心に宿る不安に^{ゾルゲ}ふれ、「不安は悩みに満ちた有益な存在で、これなしにはどんな生物も生きられない。生物はそれを自分から突き離すか、後で一層熱烈にそれを求める」と説く。また神父は不知と忘却の功徳にもふれる。

さて、神父はエルトマンからクリストーフオルス神父と呼称されている由来を聞かれて、「クリストーフオルス」はローマ・カトリック教会の聖者で、一四人の救難聖人の一人だ。彼ははじめある王様に仕

えたが、この王様はある種の迫害妄想にかられ、サタンを恐れたとき、クリストーフオルスもサタンを自分より強い者と思い、これに仕えた。ところが悪魔がイエス・キリストの教え、とくに山上の垂訓に負けたのを見て、その後はキリストにのみ仕えたいと願った。あるとき大洪水で岸から氾濫した大川のほとりで少年に出会い、少年イエスを溺死から救ったが、あやうく子供もろとも溺れかかった。この私も真のクリストーフオルスのように重荷を抱いて川の中を渡って歩き、この世を放浪している。なぜなら自分はまだ真のクリストーフオルスのような天国の全知者ではないから」

少年は真剣な顔をして聞いた。「それではお父さんはどこにそれに該当する少年をお持ちですか」

神父は感動した調子で言った。「今日はまだお前にそれを言えないよ」

つづいて神父は、「我々はパラダイスの途上にあるが、キリスト教的宗教のみがパラダイスを知っているのではなく、モハメット教徒にも、インド人にも、中国人にも、アジアの他の民族にも大平洋の無数の島々のあらゆる民族にもあるのだ。ただしパラダイスは我々がナザレのイエスを信ずる限り、我々の内部にあるという意見には自分はいくみしない」とエルトマンに言い、善行の伴わない主観主義的信仰の危険を示唆している。

山上の垂訓の中の「あなたの隣人をあなた自身のように愛しな

(11)「たといわたしが人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしはやかましい鐘や騒しい鐃鉢と同じである」(12)「人をさばくな、自分がさばかれないためである」(13)……この愛こそパラダイスへの道の最高のものであると神父は念を押している。

善人のアベルが殺されたが、なぜ神はこの世のあらゆる善と愛の化身であった第二のアベルともいうべきイエスと名づける神御自身の息子に、同じような血なまぐさい処刑を与え給うたのかという素朴な疑問から神父は今だに離れないのである。

神父はエルトマンに「私は詩人であつて、予言者ではない。モハメットは両者を兼ね具えていた。彼は自己の文学に真理のレッテルを貼った。彼の予言は怒れる神を知らないのだ。詩人の私は世界を詩的にのみ理解し、独善家の狂信は伴わない。あるドイツの哲学者の言葉を借りれば、『我々が可視的世界をその本質とともに観察すれば、我々は肉体の中にある心のように、可視的世界の中に隠れているところの不可視的霊的世界の比喩を発見する。そしてそれによって我々は隠れ給う神が一切に近いものであり、且一切を通して存在はするが、やはり可視的存在には全く隠れ給うのを見るのである』」

ナザレのイエスのまわりには世界を支配する強力な神話が作りあげられ、この中で彼は神となったという神父の言葉に、エルトマンは神父に「母は私の夢の中で現われて『自分はキリストの花嫁のうちの一人である』と泣きながら私の耳にささやき、うっとりして自分の夫の

ことを物語ってくれた。キリストは神話ではなく、生きている神様でした。お父さん、イエスのぎせいは神話ではない。なぜならそれから人類の夢にすぎないことになるから」

「そうだ、エルトマン、信ぜよ、ただ信ぜよだ。神が自分の息子をぎせいにしたという非難を私は撤回する。救世主は聖徒たちと同じく自己自身をぎせいにし給うた。救世主はそれを模範として行動し、天国への道を示し給うたのだ」と神父は答えるが、イエスの神話は何十万人の人間の心を通して二千年も伝統を経て来た純粹の真理であると強調する。しかし、神父はエルトマンに、言葉を余りきちようめんに取ってはいけない。精神こそ無限であつて、精神はあらゆる矛盾を統一するところの無言である。この無限の空間にあつて信仰は我々死ぬべき人間にとってたしかに必要である。しかし信仰は無限の精神の中に生きていくものの、しよせん有限なのだと言ふ。

エルトマンの「人はこの短かい人生において天職を自覚して精進することが大切だと感じた」との意見に、神父は心から賛意を表し、人間は理想に燃え、文化を創造して行くが、その原動力となる幻想がなければ、人間生活は停滞してしまふと、独自の認識の源としての夢と幻想の本来の価値と使命について語る。

エルトマンは夢の中の諸体験について考える。「パーヴェル牧師も人生それ自身夢にすぎない。覚めているのも夢だ」と言っていたが、自分はこう考える。我々は夢の中に対象のない感覚や表象をもつ。

我々の影響、夢の中の我々の意志、行為やその抑制作用はどこに留まるのか。彼は「在天の神様、あなたは冷静明晰な生命を夢よりもぎ取り給い、私どもに偉大なわざを為し給うた。これをもってより高度の秩序を作り、私どもにあなたの明晰さを理解させ給うた」と祈り、夢は死から生への橋だと考え続ける。彼は重なる失神と夢想の体験の中で、キリスト受難への信仰が深まり、父なし子で育って来た自分の父が、このクリストーフオルス神父であるのか、それとも自分の父は本来プロメーティスであって、自分自身はダイカリーオンなのかしらと自問し、神は今自分に新しい人間創造の使命を課し給うたのだといううづぼつたる使命感と悲愴感に目覚め、身ぶるいするのである。

これよりさき神父の瞑想の中に、「私が生きている限り、死について何を知っているのか。しからば死を知らない生ける人間が何故死についてそのように多くの恐怖と戦慄を以て語るか。人間は死なねばならないということは疑い得ない命題である。すべての感官はこの事実を伝えてくれる。生者が病気によって幾度も死の近くへかり立てられるが、ただ個人／＼の死があるだけで、それで死が合計されるものではない。そこに一つの慰めが存する。個人が全体から贈られるものはその誕生以前の起源の中に存する。我々の感官の活動はこの世の何物も不動ではないように、つねに動いている。静止をもたらずのは死だけである。この『だけ』という言葉は想像に基く。我々はただ無意識について知るだけである。無意識は失神と熟睡の中で経験となる。阿

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現れた死生観について(小島 尚)

者とも個人によって苦痛を解放する善行として体験される。無知は失神とは異なるが、我々は死については無知である。無知は善良極まる霊によって与えられた無限の善行である。科学も芸術も無知に囲まれているが、しかしそれによってのみそれらは高度に到達する。人間の最高の価値は芸術作品の中における神的なものの啓示である。芸術はロゴスの象徴である。ロゴスとは他者なる神であり、一切一切と人間との間の仲保者である。芸術はすべて制限が基礎となっているが、制限なしには広さはない。不知なしには認識欲はない。認識の欠如なしには認識行為はない」とあり、ハウプトマンはアフォリズムの中で、「すべての判断は偏見である」(Alle Urteile sind Vorurteile)と書いている。

第四卷

神父のラブダ伯老嬢に対する講義の形で、政治経済文化の各領域にわたるドイツの近代史をかなり詳細に叙述し、さながらハウプトマンの自伝を読む思いがする。近代史は科学技術の未曾有の発展に裏づけられているが、技術の過信と精神の軽視が近代の危機と不安を助長したことを述べ、神父はファウストの思想を越えて、インドの宗教的著作の魔力的(zauberartig)と名づける世界にくつろぎを覚えるに至った心境を語る。彼は吠陀の言葉として、

「人は信ずるときに考える。信じなければ思考はない。信仰をもつ人のみが思考をもつ。ゆえに人は信仰を求めねばならない……人は成

長するときは信仰をもつ。また創造がなければ成長はない。人は快楽を感じるときは創造する……」を引用し、我が意を得たりとしている。

神父は牧師に向って、自分はエルトマンを教育して行かねばならぬが、あの子と話をしていると、逆に教えられる」と告白している。また芸術や宗教の中に神的な表現を見出したその意義について会話を交し、最後に生と死についての両者間の問答に移り、次のような神父の言葉をもって第四巻を閉じている。

「科学は一つのフィクションです。科学は宗教から分離して来てはいません。科学が絶対的真理を求めるとき、科学はその自殺を知らず識らずにもくろんでいるのです。感覚と表象は説明しがたいものですが、前者は後者から出発し、後者すなわち表象は目というものがなくては考えられません。この事情が勤勉にして該博な知識をもつ思想家たちに顧慮されたことはないことが私には分りました。この器官すなわち眼の限界は同時に私たちの世界見解の限界であって、この見解を私たちは事実、一般に世界観と称して月並化してしまつたのです。太陽なくしては宗教がなく、太陽によって光を養われて来た眼がなくなると同様に宗教は存在しません」

むすび

既述「アトリーデン四部作」(Die Attiden-Tetralogie) (一九四一—四九)の悲劇と、先妻の追悼や自国の戦争政策に対する諷刺を夢の姿

に托して、夢にこそ真実があり、真実にこそ夢があると歌った「大いなる夢」(Der große Traum) (一九四三)の大作叙事詩とともに、長篇「新クリストーフォルス」はハウプトマンの晩年の三大力作であるが、彼は中でもこの長篇を自分のライフワークと見て、何十年も寸暇を惜しんでメモを取り、考え、自己の全教養を投げ込んで書きつづけ、終戦の年の二月十三日にはドレースデンの大空襲を身を以て体験し、九死に一生を得たが、終戦直後の混乱時も筆を折らず、完成を期したが、ベルリンへ移住の直前、八三歳の高齢を以て世を去ったのは、惜しみても余りあるものがある。

ハウプトマンは一九四四年三月から四月のメモで、「私は神父をむしろゲーテと同一視すべきものであろうか。その教訓好きの点が」と書き、一九四四年九月十四—十六日のメモでは「新イエス(エルトマン)は絞首刑となる」とあり、ハウプトマンはエルトマンをして隣人愛の権化たる殉難者イエスの再来として新たに人類救済の一助たらしめようとも考えたらしい。また一九四四年三月十六日のメモに「ゲーテの言うように、人間が真剣に掛り合うものはすべて無限である。つまりそれは本来的な初めも終りもないことであろう。伝達者の役目も、クリストーフォルスもエルトマンも同様に断片的なものに留まらねばならない」とあり、ドラマの本来の姿は永遠の断片であって終りはないと考えていたハウプトマンは、この大作の完結を不可能と考えていたのかも知れない。

神即自然という汎神論的スピノーザに共鳴を見出したゲーテは、キリスト教にも深い理解を示しながらも、キリストの復活宗教は信じていなかったようである。しかしすべてを合理主義的に解決し得る領域は、あくまで迷信を斥け、科学的に追求すべきであるが、人間の悟性ではどうしても把握し得ない。人知に不可解な神秘や神聖なものは存在し得るし、それに対しては自分は敬虔に頷ぎたい。この世に神聖なものなどはないと考える者は、自分の心に神聖なものが宿っていないからであり、少くとも神聖なものを感じ得る能力に欠けているからである。眼が太陽を見得るのは、眼に太陽と同質なものが存在するからであるとゲーテは言っている。

ハウプトマンの考え方もこれと似ている所があるが、夢や幻想や幻影を現実の一部または延長と見なすロマン主義者の一面が濃く、神話や神秘に真実以上の憧憬を持ち、スピノーザと同じく、自然の中に神の遍在を認める汎神論的傾向のベームに共感し、神との神秘的合一を求める。彼は仏教的無や輪廻の思想に親近感を覚えたが、一方幼時からキリスト教に親しんだので、特にイエスの隣人愛、無私的自己犠牲の精神に打たれ、イエスを霊の香りの強い宗教的天才、神的な人とは感じながら、イエスをあくまで人間として見ており、イエスは神の一人子であるが、人の子として生まれ、十字架にかかって復活して永遠の生に入ったと説くオゾン Dock のキリスト教信仰には最後まで入り切れなかったようである。つまり彼はキリスト教的信仰に入るスプリ

ゲールハルト・ハウプトマンの作品に現われた死生観について(小島 尚)

ングボードに欠いていたとも言えるが、それへの憧れは晩年ほど強くなって来たらしく、臨終の床の上で聖書を開き、主のまぼろしと啓示について語るパウルの言葉として、「それがからだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神が御存じである——この人がパラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない人間が語ってならない言葉を聞いたのをわたしは知っている」の個所に赤線でアンダーラインを引かせて、永眠したのは誠に印象的である。

最後にハウプトマンの七三歳一九三五年作の詩の拙訳を紹介して筆を擱く。

そはわれなり

わが庭にさまよふひともの樹——

そはわれなり

その梢泡のごとく消えうせ

夢そのなかにさざめく

斧をもちされど黙々と

死なる大工わが周囲を巡る

身のまはり

燃ゆる陽に包まれつ

われらふたり手をとりにてさまよふ

わが庭の孤独のなかを

ああ死すでにわれに伴ひ来て久し／
 いつの日ぞ死はいふならむ「時来れり」と
 かかるときぞさらばわれにその用意あり

一九七九・一〇・四

附記。正宗白鳥が死の直前、神と永生を信ずると言つて、祈りの中に亡くなったと聞いて、船橋聖一は「白鳥は脳軟化症になったのだ」と書いたが、神を信じない者から見れば誠にその通りかも知れない。しかし筆者は、白鳥は決して狂わない頭の、はっきりした意識の下にそう言ったと考える。白鳥はかつて内村鑑三の門に出入し、後で離れてキリスト教に批判的な皮肉な随筆を書いているが、ダンテの神曲は終始白鳥の愛読書であつたし、靈魂救済への思念は年と共に秘かに熾烈化して行つていたのであるまいか。

× × ×

ハウプトマンによれば、マルクスの「宗教は民衆の阿片である」という命題や、フォイエルバッハの「宗教の本質」において、神は人間が自己の願望の対象を理想化した幻想にすぎず、人間は自ら作りあげた宗教（神）のなかで、自分自己を失っているのかかる宗教の自己疎外から自己を解放し、生き生きとした人間性をとり戻さねばならぬと説く見方は、歴史の現象面の上から見れば正鵠を射ている所少くないと思つていたので、作品にもそれが反映しているが、マルクスの「意識が存在を決定するのではなくて、存在が意識を決定する」とい

う命題には、ハウプトマンは必ずしも納得せず、精神の物質に対する支配力、優位性を確信していたらしい。すなわち遠藤周作も言っているように、社会的外部革命にはその限度があり、それは必要ではあるが決して十分な条件ではなく、究極において真の幸福と悩みの解決は自覚的内部革命に俟つ外はないと考えていた。

今世紀になって、理神論的自然神学を排して、聖書の証とするイエス・キリストが神の啓示であるという立場に一貫して来たカール・バルトと、新約聖書の中の神話的世界像の非神話化や宣教の実存的解釈によつてキリスト教の人格主義的理解を導入したルドルフ・ブルトマンとの論争以来、種々の神学的理論が展開されて来ているが、日本でも赤岩栄の唯物弁証法的社会認識と生命の宗教という二元論的問題提起以来、最近は滝沢克己、八木誠一編「神はどこで見出されるか」において、滝沢は西田哲学から出発して、バルトに学び、自己成立の根底として「神我等とともに在す」という原事実から思索しつつも、社会認識においてはマルクシズムに強い関心をもち、一方八木は内村鑑三の無教会主義から出発して、ブルトマンに学び、禅仏教と接触し、宗教的実存と純粹直観（分別知が破れ、克服された地点での現実の見え方）を通して神の認識は必しも聖書の中の奇蹟的、超自然的の働き、啓示による必要はないと主張して、現代人の科学的世界認識との調和を図ろうとしている。しかし滝沢は純粹直観という内容の無限定性を批判して八木と論争を重ねて来た。他方反体制的社会認識の

上に立つ田川健三のように、八木の純粹直観という考え方を主観的観念論だと批判するが、彼自身あくまで厳正訓古学的立場から「マルコ伝」を執拗に追求しつつも、教条主義的公式主義では納得し得ない何物かをその中に読み取ろうとしているらしい聖書学者もある。筆者は滝沢、八木両者のいわゆる異端の聖書学者の影響下に、独自の伝導の道を模索しようと志しているように思われる中村悦也牧師一派の今後の宗教的実践に深い関心をもって見守る者である。

註

- (1) Josef Nadler: Literaturgeschichte der deutschen Stämme und Landschaften. IV Bd. S. 715.
- (2) Das Abenteuer meiner Jugend.
- (3) Joseph Chapiro: Betrachtungen aus Gesprächen mit G. Hauptmann
- (4) 「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネによる福音書、一七、二三)
- (5) ルカによる福音書、一七、二一
- (6) ガラテヤ人への手紙、二、一九と二〇
- (7) マタイによる福音書、五、三
- (8) マルコによる福音書、一〇、一五
- (9) Friedrich Schlegel: Geschichte der alten und neuen Literatur
通常新教の教会において礼拝の際、信仰告白の最後で会衆一同朗読するが、これは原文でも全文採録されている。
- (10) 我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主イエスキリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり、天に昇り、全能

- の父なる神の右に坐したまへり。かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん。我は聖霊を信ず、聖なる公堂の教会、聖徒の交はり、罪の赦し、身体からだのよみがへり、永遠とこしほの生命を信ず。アーメン。
- (11) マタイによる福音書、五、四三―四四及びガラテヤ人への手紙、五、一四
 - (12) コリント人への第一の手紙、一三、一
 - (13) マタイによる福音書、七、一
 - (14) コリント人の第二の手紙、一二、四

主要参考文献

- Gerhart Hauptmann: Sämtliche Werke. Centenar-Ausgabe (Bd. 1-11). Propyläen. 1966-1974
- Gerhart Hauptmann: Der neue Christophorus. Propyläen. 1965
- Gerhart Hauptmann: Leben und Werk (Gedächtnisausstellung zum 100. Geburtstag) 1962
- C.F. Behl/Felix A. Voigt: Chronik von Gerhart Hauptmanns Leben und Schaffen. 1957
- Joseph Chapiro: Gespräche mit Gerhart Hauptmann 1932
- Joseph Gregor: Gerhart Hauptmann Das Werk und unsere Zeit 1949
- Karl S. Gutke/Hans. M. Wolff: Das Leid im Werk Gerhart Hauptmanns 1958
- Helmut Gutknecht: Studien zum Traumproblem bei Gerhart Hauptmann 1954
- Eberhart Hilscher: Gerhart Hauptmann 1969
- Jean Jofen: Das letzte Geheimnis (Eine psychologische Studie über die Brüder Gerhart und Carl Hauptmann) 1972
- Gerhart Kersten: Gerhart Hauptmann und Lev Nikolaevic Tolstoi 1966
- Federick Alvin Klemm: The Death Problem in the Life and Works of Gerhart Hauptmann 1939
- Arno Lubos: Gerhart Hauptmann (Werkbeschreibung und Chronik)

1978

Hans Mayer: Gerhart Hauptmann 1970

D. Meinert: Helenismus und Christentum in Gerhart Hauptmanns

Atridentetralogie 1964

Hans Joachim Schrimpf: Gerhart Hauptmann 1976

Felix A. Voigt: Gerhart Hauptmann Der Schlesier 1953

Seiichiro Yokomizo: Gerhart Hauptmann (Ikubundo) 1976

Gerhart Hauptmanns Betrachtungen über Tod und Leben in seinem
Werk (besonders im Roman "Der neue Christophorus")

Hisashi KOJIMA

Zusammenfassung

Gerhart Hauptmann, der unter dem Einfluß der Herrnhuter Brüdergemeinde, die es zum Zentrum ihres pietistischen Lebens machte, die selbstlose Nächstenliebe in die Tat umzusetzen, aufwuchs, neigte dazu, den Dogmatismus und den Formalismus des bestehenden berufsmäßigen Priestertums, vor allem das im katholischen System zu kritisieren. In seinen Dramen, aber auch in seinen unveröffentlichten Fragmenten von Dramen und Romanen und Aufsätzen versuchte Hauptmann klarzustellen, wie das Christentum sich im Namen der schönen Mission dafür begeisterte, gegen das andere Volk Krieg zu führen und ferner orientalische oder unkultivierte Völker auszubeuten.

Schon in seiner Jugend fand die Lehre des mystischen Philosophen Jakob Böhme großen Anklang bei ihm. Später spürte der Dichter eine innerliche Verwandtschaft für den Buddhismus, insbesondere für dessen Lehre der Metempsychose.

Hauptmann schreibt: Duldsamkeit ist die Religion der Zukunft. Die Kunst ist meine Religion. Nach seiner Ansicht wird die reine Kunst aus dem wahren Frieden geboren.

Seine tiefe religiöse Weltanschauung kommt vorwiegend in seinem leider unvollendet gebliebenen Roman "Der neue Christophorus" zu voller Entfaltung, wenn dieser auch ab und zu auf Kosten des dichterischen Effekts allzuviel ähnliche aufsatzartige Faktoren enthält wie Goethes Wanderjahre. Im neuen Christophorus, in einem mehr katholisch als protestantisch gebildeten Bergpater, der einen genialen Knaben Erdmann als gegenwärtigen Deukalion zu erziehen gewillt war, wollte der Dichter sein eigenes Idealbild finden.

Sein religiöser Roman "Der Narr in Christo Emanuel Quint" zeigt einen besseren Abschluß, obwohl dessen Held uns nicht ganz Befriedigung darin gewährt, daß er zwar als eine so selbstlose christusähnliche, aber leider geistig zu arme Person dargestellt ist.

Als Antithese der Abstinenz wäre seine auch stilistisch meisterhafte Novelle "Der Ketzer von Soana", deren Held als katholischer Priester leidenschaftlich Mission trieb, aber letzten Endes der Macht des Eros erlag, zu nennen.

Sein Romanfragment "Die Wiedertäufer", welches an Luthers Betreibung einer Verständigungspolitik mit dem Fürstentum und damit an seiner Vernachlässigung des damaligen Bauernstandes scharfe Kritik übt, wäre nicht außer acht zu lassen.